2023年4月23日　朝 礼 拝 順 序 (午 前 10 時 半)　(№17)

司式　杉山昌樹牧師

前　奏　奏楽　豊島慶子姉

開 会 招 詞　詩編105編1－5節

＊ 賛 美 歌　１４:1（ソングシート）

1. ほめたたえよ、つくりぬしを、きよきみまえにひれふし、ささげまつれ、身をも魂をも　たぐいなき御名をあがめて。　アーメン

＊ 開 会 祈 祷

罪 の 告 白　祈祷書2　罪の告白①

神よ、わたしを憐れんでください。御慈しみをもって。深い御憐れみをもって、背きの罪をぬぐい去ってください。わたしの咎をことごとく洗い、罪から清めてください。わたしは咎のうちに産み落とされ、母がわたしを身ごもったときも、わたしは罪のうちにあったのです。わたしを洗ってください。雪よりも白くなるように。神よ、わたしの内に清い心を創造し、新しく確かな霊をさずけてください。救いの喜びを再びわたしに味わわせ、自由の霊によって支えてください。主よ、わたしの唇を開いてください。この口は、あなたの賛美を歌います。　主イエス・キリストの御名によって。アーメン。　(詩編51)

罪の赦しの宣言

十　戒　祈祷書4

1. あなたは、わたしのほかに、何者をも神としてはならない。
2. あなたは自分のために刻んだ像を造ってはならない。それにひれ伏してはならない。それに仕えてはならない。
3. あなたは、あなたの神、主の名を、みだりに唱えてはならない。主は、み名をみだりに唱える者を、罰しないではおかない。
4. 安息日をおぼえて、これを聖とせよ。
5. あなたの父と母を敬え。
6. あなたは殺してはならない。
7. あなたは姦淫してはならない。
8. あなたは盗んではならない。
9. あなたは隣人について偽証してはならない。
10. あなたは隣人の家をむさぼってはならない。隣人の妻、またすべて隣人のものをむさぼってはならない。　(出エジプト20、申命記5)

＊ 賛 美 歌　１４：３（ソングシート）

3. めぐみの神、さかえの主を　もろごえあげてたたえよ。
つよき手もてみちびきたもう　主にのみ御栄えつきざれ。アーメン

公 同 の 祈 祷　34　日本キリスト改革派教会創立記念日

教会のかしらイエス・キリストの父なる神さま、日本キリスト改革派教会の創立を感謝します。わたしたちの目を真理へと開き、その証しによってわたしたちの心を感化し、その献身によってわ

たしたちの意志を強め、わたしたちの歩むべき道を導いた創立者たちと、そのあとに続いた人々を覚えます。わたしたちは、ひたむきにあなたに仕えた彼らの生涯を喜びます。わたしたちも、彼らの信仰を受け継ぎ、改革の志を高く持ち、果たすべき務めを全うして彼らと結ばれますように。

アーメン。(「創立宣言」)

献　　金　　(黒)・(赤)創立記念　70

今献ぐるそなえものを　主よ　清めて受けたまえ　アーメン

聖　書　朗　読　　ゼファニア3章14－20節（旧約聖書1474頁）

ルカ24章13－35節（新約聖書160頁）

説　教・祈　祷　「主が示される」杉山昌樹牧師

＊ 賛　美　歌　４６:１，３（ソングシート）

1. 主はいのちを　与えませり、主は血しおを　流しませり。

その死によりてぞ　我は生きぬ、われ何をなして　主にむくいし。

3. 主は赦しと　慈しみと　救いをもて　くだりませり。

ゆたけきたまもの　身にぞあまる、ただ身と霊とを　献げまつらん。**アーメン**

＊ 主　の　祈　り　　祈祷書1

天にまします我らの父よ

願わくは御名をあがめさせたまえ

御国を来たらせたまえ　御心の天になるごとく 地にもなさせたまえ

我らの日用の糧を 今日も与えたまえ

我らに罪を犯す者を我らが赦すごとく 我らの罪をも赦したまえ

我らを試みに会わせず 悪より救い出したまえ

国と力と栄えとは 限りなく汝のものなればなり　　アーメン。

＊ 頌　　栄　　６７

主イエスのめぐみよ、ちちのあいよ、みたまのちからよ、あぁみさかえよ。アーメン

＊ 祝　　祷

後　　奏　　(黙祷)

報　　告 司会那珂百合子長老・受付雨宮信長老（次週：門脇献一・那珂百合子長老）

本日　受付　１階：大日南隆夫・佐藤紀子執事　２階：森永美保執事　／ZOOMホスト・録音：森永翔馬

次週　受付　１階：佐藤紀子・古澤迪子執事　２階：森永美保執事　／ZOOMホスト・録音：番場験也

ルカ24：13－35　「主が示される」

眼の光

今日は一つの詩編の言葉を読んで始めます。「主の命令はまっすぐで、心に喜びを与え／主の戒めは清らかで、目に光を与える。」（詩編19：9）。ルカによる福音書にも「あなたの体の灯は目である」（11：34）という言葉があります。目は口ほどに、とも言いますが、希望にあふれた目、強い光を放つ目、生き生きした目は、気持ちのいいものです。できればそのような目をもって生きていたいと思います。しかし、このような目の光が曇ることがあります。例えば今日の聖書では、「目がさえぎられていた」という言葉あります。それによってイエス様が見えなくなっています。その時弟子たちは絶望していました。今日は、このところからイエス様と、希望と、目の光、の関係について一緒に聖書を読んでいきたいのです。

失望の理由

この所で登場します、二人の弟子の一人はクレオパという名前であったことが18節でわかりますがもう人は不明です。いわゆる12弟子よりも広い範囲の弟子仲間であったようです。彼らはこのエマオというエルサレムに近い町の出身だったのではないか、ガリラヤ以来の古い弟子ではなく、エルサレム周辺に住むもの達だったのではないか、と言われています。二人はこの日曜日、イエス様の復活を待ち続け、イエス様がご自身で、言われたように復活し、自分たちの所に来られるのではないか、このように期待して待っていたようです。彼らが期待したのは、イエス様のお言葉もそうですが、もう一つ、朝方に女性の弟子仲間たちがもたらした知らせ、天使たちが現れて「イエスは生きておられる」と告げた、というあの知らせも関係していたかもしれません。やはりイエス様は約束通り、復活されたのではないか、このように期待していたのです。一度は処刑によって絶望したけれども、復活されたかもしれない、このような希望をもって、一日を過ごして、しかし、時間と共にその希望はだんだん色あせて、どうやら、あの処刑から三日目の今日も何も新しいことは起こらない、このままエルサレムにいても仕方がない、とりあえず家に帰ろう、そのようにして出かけたというのがこの書き出しの状況のようです。

期待が砕かれて

彼らは、「歩きながら一切の出来事について話し合っていた」と14節にあります。繰り言、という言い方があります。同じところを話がぐるぐると回っている状態です。なぜ、イエス様はあのように処刑されてしまったのか、ということから始まって、三日後に復活すると言われていたのではないか、それではイエス様は、失敗されたのか、それとも偽物だったのか、しかし、あの力強い多くの業は、何だったのか、というように、イエス様が力強く活躍されたことから始めて、逮捕され十字架に死なれたこと、復活の噂、しかし、それも確かめられず、でもあきらめきれず、結論の出ない話を続けてしまうという状態です。私たちは、このようなありかたを知らないわけではありません。何か、思いがけないことがあった時、悲しいことがあった時、わたしたちは、もう充分に分かっているはずのことを、何度も何度も、ぐるぐると話してしまっている、そのようなことがあるのではないでしょうか。尽きないことを話し合い論じ合っているというこの状態こそが、この二人の失望をはっきりと示しているように見えます。

寄り添うイエス

ところがこのようにして、失望のどん底ともいえる二人のところに、イエス様が近づいてきて一緒に歩き始めるのです。しかし、二人にはそれがイエス様だとはわかりません。「眼が遮られていた」、と聖書は語ります。これは、特徴的なことで、復活したイエス様が目の前にいても、それをイエス様だと見出すことができない状態です。これはとても象徴的な出来事で、実は、復活のイエス様は、私たち人間にとっては、そのまま目に飛び込んでくるものではなく、むしろ、見つけ出されるもののようなのです。この場合、エマオに向かう二人の目には、別の景色が映っていました。それは彼らの描いた希望の幻です。ある意味では、このようであってほしいという願いです。しかし、彼らの希望そのものは、決して間違ったものではなかったのではないか、私はそのように理解しています。

支配からの自由

例えば、ルカによる福音書にこのような言葉があります。「「ほめたたえよ、イスラエルの神である主を。主はその民を訪れて解放し、我らのために救いの角を、／僕ダビデの家から起こされた」（1：68－69）。これはヨハネの父であるザカリヤが、神様の霊に満たされて語った言葉です。この言葉の中に当時の人たちの希望がはっきりと示されています。それは、ダビデ家から出た新しい王によって民が解放される、という希望です。さらに、神殿で赤ちゃんであったイエス様を見た女預言者アンナは、「エルサレムの救いを望んでいる人たち」に向かってイエス様のことを話したと記録されています。今までさんざんひどい目に会わされた、今も実際に生活が苦しい、日々ローマ支配の重さを感じている、しかし、それから解放されるのではないか、いや、是非解放されたい、このような希望を持つことは、決して間違っていないはずです。むしろ、様々に自分を苦しめるものから、できれば自由になりたい、と願うことは人間にとって当たり前のことです。多くの発明や、社会運動はこのためにあります。そして、社会をいっぺんに変えてしまう究極の方法は革命です。イエス様によって革命が起きる、二人はこのように期待していました。ところが、一緒になって革命を起こせばよいはずの祭司長たちや議員たちといった指導者はむしろ、イエス様を殺してしまった、何で馬鹿なことをしてくれたことか、このように彼らは嘆いていたのです。世界が変わるチャンスは消えた、これが彼らの見ていた世界観です。

聖書の語るところ

しかし、それに対して、イエス様は、「本当にそうか？」と言って語り始めるのです。その中でも特徴的な言葉があります。それは「預言者たちの言ったこと」です。ほかでもない旧約聖書におさめられた言葉、それもイエス様について語っているとしか思えない言葉、そのような言葉を選んで、二人に向かって一つ一つ丁寧に語ってくださった、というのが17節で描かれていることです。ただ、その時に語られた聖書がどこであったのか、ということについては特に記されていません。記されていませんけれども、話の内容としては16節に「メシヤは苦しみを受けて栄光に入るはずだったのではないか」とありますから、その線に沿ってということになります。それで例えばとても有名なイザヤ書の苦難の僕について書かれたところにはこんな言葉があります。「捕らえられ、裁きを受けて、彼は命を取られた。彼の時代の誰が思い巡らしたであろうか／わたしの民の背きのゆえに、彼が神の手にかかり／命ある者の地から断たれたことを。　彼は不法を働かず／その口に偽りもなかったのに／その墓は神に逆らう者と共にされ／富める者と共に葬られた。」（53：8，9）。まさに、この通りに、イエス様は、捕らえられたのですし、まさに犯罪者として、墓に葬られたのでした。全く罪がなかったにもかかわらずです。それで大切なのは、このようにして聖書から語られる言葉が、二人にとっていちいち思い当たった、もっと話を聞きたいと思えたことです。

もう少し話を－目が開かれる

やがて、目的地であるエマオに着いたときに、イエス様は、なお先に進もうとされました。二人はそれを押しとどめて、是非一緒に泊まってください、と頼んでいます。イエス様はそれを受け入れて家に入るのですが、そこで不思議なことが起きています。本来であれば、イエス様は招かれた客、そして、二人の方が招待をした側なのですが、ここでは、まるでイエス様が客を招いた主人のようにふるまって、食事のリードをしています。そして、イエス様が機会があるごとに行っていた、独特の祈りをしています。それが「イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを割いてお渡しになった」というところです。これはイエス様が5000人を養われた時（9：16）、あるいは最後の晩さんにおいて弟子たちにパンを渡された時（22：19）と同じ振る舞いです。そして、この振る舞いを見たときに、二人の目が開かれています。なぜ、そうなったのかはわかりません。あえて言うのなら、イエス様によって二人の前に届いている神様の力、神様の国が、この時二人に手渡された、というように言えるかもしれません。そしてその瞬間、二人はイエス様は失敗したのではない、神様は失敗したのではない、むしろこれでよかったのだ、イエス様は本当に復活されたのだ、という事実へと目が開かれたのです。

実は一緒だった

　それはとても幸福な経験です。なにしろ、今まで自分たちが信じてきたイエス様は、決して失敗していなかった、むしろ、自分たちは神様の確かさの中に生きていた、と分かる体験だからです。そのうえで、今日はもう一つのことを確かめたいのです。それは、このところの話自体の持っている構造についてです。弟子たちは、失望の中にいました。そしてイエス様はその二人に寄り添ってくださっていました。その場合には、二人が失敗した、全く希望がない、と思い詰めているその時に、すでにイエス様のお働きが彼らの間に届いていた、ということになります。それで、もう一つイザヤ書の言葉を読んでみます。「彼らの苦難を常に御自分の苦難とし／御前に仕える御使いによって彼らを救い／愛と憐れみをもって彼らを贖い／昔から常に／彼らを負い、彼らを担ってくださった」（63：9）。私たちの心が冷え切っているところ、何の嬉しいこともない、と思い詰めているその所、苦しくて仕方がない心、その苦難を、実は神様は同じところで苦しんでくださっていた、ということを聖書は語っています。その最も苦しいところで、神様は実はその苦しみを担ってくださっていた、というのです。それが後から分かるというのです。むしろ、これは後からしか分からないというのです。とても厳しいところを超えたと思って振り返るとこの景色が見えるというのです。

燃える心

　そして、このような意味で、イエス様の語られた言葉によって物の見方が変わる、変えられるということをこの時二人は体験しました。それで彼らは振り返りの言葉を語っています。「道で話しておられるとき、また聖書を説明してくださっていた時、私たちの心は燃えていたではないか」（32節）。あの時はわからなかった、でも、確かに、聖書の言葉と一緒に語られたイエス様の語り掛けによって、自分の中に燃えるものが出来上がっていた、確かに、自分の中に、燃えるものがある、このことにはっきりと気が付いたときに、彼らは、思わずエルサレムの仲間の所に向かって走り始めたのです。冷めた心は燃える心に作り替えられたのです。そして同じ体験をした仲間たちと一緒にそのことを確かめ合い、喜び合ったのです。おそらくその時、すべての弟子たちの目は、光り輝いていたのです。

主が示される

　復活のイエス様が語り掛けられる時に、人は造り変えられます。それは、今も変わりありません。それは場合によっては、何もない、と思っているところ、あるいはむしろ、悪いことばかりだと思っているその所であるかもしれません。しかし、はっきりとしていることがあります。それは、わたしたちが、今の目の前の現実を、どのように見ていたとしても、イエス様がその時々に示される言葉によって、わたしたちの向き合う現実の本当の姿は必ず明らかにされ、そして、その時には、私たちの目にも、力強い光が与えられるということです。

　祈り

　主イエス・キリストの神様。私たちは、主イエスの弟子とされながら、なお、主イエスとともに歩む恵みについて、目がふさがれていることがあったかもしれません。けれども、そのような私たちのすぐそばに、イエス様が共にいて下さり、私たちの目を開いてくださいます故に感謝します。私たちがこの週も、この明るい見通しと喜びをもって歩んでいくことができますように、また、たとえ離れていても、互いに執り成し、喜びを分かち合って行けますようにお導き下さい。感謝して主イエス・キリストのみ名によってお祈りします。アーメン